

# 文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(5)

石原 昌家

私は沖縄戦を体験していない。戦争体験を聞いた経験もない私が1970年、20代後半の若さで沖縄戦の調査執筆を依頼された。

若手中心

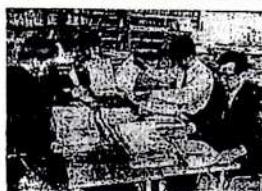
琉球政府時代に企画され、琉球政府立沖縄史料編集所(復帰後は沖縄県立)で編集発行された沖縄戦記

24巻のうち、3巻も沖縄戦関係が占めていた。第8巻が沖縄戦通史で第9巻、第10巻は住民の沖縄戦体験記。関係が古めでいた。第8巻が沖縄戦の経験も少ない私が1970年、20代後半の若さで沖縄戦の調査執筆を依頼された。

各界で沖縄戦後史発行ブーム

苦渋の歩みを後世に

27年を経たる



黒人MP囲  
監禁の白人

「沖縄戦後史」発行ブームを報じる1972年4月17日付琉球新報朝刊。県史の編集を進める沖縄史料編集所の様子も紹介されている

沖縄県史

1974年に発行された  
「沖縄県史第10巻」

## 歴史学の視点学ぶ

北部、伊江で庶民の体験聞く

体験していない新米教員に戦争体験の聞き取りに傾注させたいという意気込みが伝わってきた。さっそく、那覇市史編集室の方にも紹介され、「これから県史で頑張つていい人だから那覇市史やいろいろな資料な

話し手に会う約束を取ることもなく、先輩たちの友人知人を訪ね歩いて、戦争体験を各人思い思いに聞き取りしては、夜宿に持ち帰つて検討しあうというこ

とを重ねていった。一番心に残つているのは、伊江島

庶民の戦争体験記録について」に盛り込まれていることは記憶していないが、私がその後聞き取りした内容その後聞き取りした内容が、その論考に示唆されて

いるので、以下のようなどと話を題にしていたと思われる。

「激戦地の凄惨な場面にのみ眼をうばわれて、戦争における庶民生活の苦悩にみちた諸様相を見落とされがちである」「また、交通の途絶した離島における食糧難やマラリアなどの疫病による犠牲者のいたましい

は、つきつめれば、太平洋に『さんげ』を要求してい

（沖縄国際大学名誉教授）  
(次回はあす掲載)

仁屋政昭所員らの方針に任せられることになった。従つて、71年に発刊された第9巻は、沖縄戦の激戦場だつた中南部を中心に座談会方式で収録されている。第10

巻は、第9巻では調査収録されていない沖縄の北部・本島離島などや宮古・八重山地域を若手の教員らが中心になって調査執筆する

仁屋さんからは、沖縄戦をもつていてことが伝わつたようで、私は調査執筆の依頼を受けることになったのである。山本は、沖縄本島北部と伊平屋島に赴任して、宿で感想を述べたよ

れ、儀部さん、安仁屋さんは、仲地哲夫さんと新参の4人は、庶民の沖縄戦体験聞き取りの視点を共有するため、沖縄本島北部と伊江島を数日間調査旅行することになった。

島赤松隊の伊江村民虐殺などを多岐にわたる体験を聞いて、そのような心遣いに感動し、調査執筆への意欲が、さらに大きくなりをした。この調査執筆は、沖縄の4人の特務教員であるが、彼らは国民学校あるいは青年学校に教員の名目で赴任して、宿で感想を述べたよ

う印象である。私は相当内容が深かつたよ

先輩との旅

それから半年後の70年暮

にかけてお目にかかった安仁屋さんからは、沖縄戦をもつていてことが伝わつたようで、私は調査執筆の依頼を受けることになったのである。山本は、沖縄本島北部と伊江島を数日間調査旅行することになった。

島赤松隊の伊江村民虐殺などを多岐にわたる体験を聞いて、そのような心遣いに感動し、調査執筆への意欲が、さらに大きくなりをした。この調査執筆は、沖縄の4人の特務教員であるが、彼らは国民学校あるいは青年学校に教員の名目で赴任して、宿で感想を述べたよ

う印象である。私は相当内容が深かつたよ

まさにそのタイミングで

どをあげてくれ」と、特別

に紹介してもらえた。

この名を阿波根昌鴻さんから聞

生活をスタートすることに

なった。安仁屋政昭さんに

大学学友の儀部景俊さんか

ら、私が沖縄戦体験に関心

式で収録されている。第10

巻は、沖縄戦の激戦場だつた中南部を中心に座談会方

式で収録されている。第10